

同窓会設立100周年記念イベントが開催報告

今年の明星祭は9月13日・14日に開催され、好天に恵まれたキャンパスは多くの来場者で賑わいました。同窓会は例年の展示に加え、児玉九十記念講堂において「三遊亭遊子独演会」、展示室において「手話通訳の紹介」を開催。ここに、その様子を報告いたします。

☆三遊亭遊子独演会

三遊亭遊子さんは明星高校の卒業生、会場では幼稚園生、小学生など年少者も含めさまざまな年代の観客が落語を楽しみました。明星祭運営委員の生徒さんに司会と進行をお願いし、講堂の舞台には緋毛氈の敷かれた上に紫色の座布団が置かれた高座が用意されました。落語家は当日の観客の雰囲気から演目を決めるとも言われますが、前座のえん馬さんの「つる」に続き、この日遊子さんの演目は「動物園」、敏捷に反応する子供たちの元気な笑い声が会場に響きます。落語のあとは、高橋尚子同窓会監事によるインタビューも行われ、高校時代の逸話も披露され、会場は一層盛り上がりしました。（文責：岩崎良子）

写真左：「動物園」を上演する遊子さん 写真右：「つる」を上演するえん馬さん



☆手話通訳の役割を語る

同窓会展示室では13日・14日両日にわたり、女25星会の稲垣みゆきさんが手話通訳の役割について紹介され、来場者からの質問に答えてくださいました。以下に稲垣さんからの寄稿を掲載します。

明星祭に参加して

女25星会 稲垣みゆき

女子部卒業以来、40年ぶりに明星祭に参加する機会をいただきました。3年ごとに開催しているクラス会の報告で同窓会に連絡したのをきっかけに職業紹介をしていただけないか同窓会に相談したところ、岩崎会長から「社会で活躍している卒業生」としてぜひ明星祭で展示・説明をしてみても、とご提案いただきました。

現在、私は手話通訳士として耳の聞こえない人たちが電話をかけるための「電話リレーサービス」とい

う仕事をしています。「通訳オペレータ」という役割です。このサービスは2021年に公的サービスとして始まりましたが、聞こえない当事者の間では広まっているものの、電話を掛けた先の聞こえる人はほとんどこのサービスを知りません。そのため、通訳から電話しても「営業」「不審な電話」と思われて切断されてしまうことがとても多いのです。行政・公共機関などの組織には周知されていても、そこで働く人たちにまでは十分浸透しておらず、「公的サービス」といいながら社会に伝わっていないと感じています。

アメリカを始め海外では当たり前のように利用されているサービスなので、日本の中で知っていただくためにはどうしたら良いか、と試行錯誤している日々です。

手話通訳という仕事があることや、どのような役割をしているかがわからないため担い手が少なく、さらに聞こえないとはどういう状態かが正しく知られていないため、聞こえない人の社会的生活には多くの障壁が残ったままという現実があります。手話通訳は福祉的な働きがある一方で、私が携わる電話リレーサービスの通訳オペレータは、英語、フランス語、中国語などの言語通訳と同じ立場の「通訳のプロ」と考えています。手話は聞こえる人が使う音声言語と同じく、視覚言語として言語学の研究もされており、外国語を学ぶように手話に興味を持ってくださる人が増えると嬉しく思います。

聞こえない人は外見から障害がわからない、同じ日本人でもコミュニケーション方法が異なる人です。生まれつき聞こえない人、中途失聴、難聴の人では会話の手段が違います。将来社会で活躍する若い中学生、高校生の皆さんにもぜひ共生社会への取り組みのきっかけを掴み、進路や生き方の参考にさせていただければと思っています。

今回の展示では十分な説明ができなかったのですが、同窓会役員の方や一部の生徒さんに興味を持っていただけたことで大変成果があったと感じました。40数年ぶりに同級生に再会したり、憧れの先輩の卒業アルバムを見たり、校舎は変わってしまいましたが懐かしい思い出に心地よく触れることができました。今回、明星祭での展示の機会をいただき、同窓会の活動を通じでお互いに応援していける場があることにとても感謝しています。ありがとうございました。

写真左：質問に答える稲垣さん

写真右：手話通訳紹介のパネル（右は遊子さん独演会ポスター）

